

ホームルームにおける手帳指導の有用性と アクティブ・ラーニングの 基礎的スキルの伸長に関する実践

関根 健雄*¹, 森下佳代子*²

Advantage in Datebook Instruction and Developing Fundamental Competencies
For Active Learning through Homeroom Activities

Takeo SEKINE, Kayoko MORISHITA

Although KOSEN first-year students need to improve their competence for self-management and interpersonal relationship, teachers could afford to train those skills during usual lectures. Therefore we employed approaches that would develop the competence through homeroom activities, because self-management and interpersonal skills can be the important parts of fundamental competence of Active Learning and function to develop autonomous students. Based on the analysis of efficiency of *Foresight Datebook* instruction and the results of self-assessment on Fundamental Competencies for Working Persons, our strategy produced some positive results for the students. This study aims to discuss the advantage of homeroom activities, focusing on datebook instruction in establishing students' basic skills for Active Learning.

KEYWORDS : Active Learning, Fundamental Competencies for Working Persons, Homeroom Activities, plan-do-check-action cycle

はじめに

アクティブ・ラーニング(以下、AL)型授業が十分に機能しない一因に、学生自身のレディネス、トレーニング不足が想定できる。同様に、ホームルーム(以下、HR)や課外活動においても、学生の「自己管理能力」、「対人関係構築力」の低下が活動に影響している現状がある。AL に関して、溝上は「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を

*1 一般科(Dept. of General Education), E-mail: sekinetakeo@oyama-ct.ac.jp

*2 一般科(Dept. of General Education)

伴う¹⁾と定義し、AL で求められる認知プロセスの外化の実施の際、学生たちがその思考や理解を伝達、議論、発表することが十分にできない背景には、学生にそれらのトレーニングがなされていないことがある²⁾と指摘しているが、それら様々なスキルトレーニングを授業中に実施することは難しい。そこで小山高専1学年3クラス(混合学級)を対象に、学級担任によるHR活動において「手帳指導」で「自己管理能力」を、集団での活動で「対人関係能力」を向上させ、効果的なAL型授業のために必要な基礎的能力を育成することを目的に研究を進めた。ALに不可欠な基礎的な能力、変容を量る指標として「社会人基礎力(経済産業省)」を設定した。本研究は、他の多くの研究のように特定の授業・科目等におけるAL型授業手法の改善や構築ではなく、工業高等専門学校³⁾の低学年クラス担任による、ALの基礎的能力の育成を目的として2016年度小山工業高等専門学校1学年3クラスで実施した試みを総括し、今後の課題・展望について考察するものである。

1. 背景・手法・検証方法

2016年度の1年生は、「混合学級」(クラスに4学科が混在する編成)の本校第1期生である。将来の学際的研究を視野に入れ、学科を超えた人間関係の構築が求められており、学生は以前にも増して主体的に意見を発信し、人間関係を構築する力を備えた「アクティブ・ラーナー」であることを求められるようになった。そこで、学生が「アクティブ・ラーナー」へと成長することを促進するために、日常生活や授業外の活動など、HR活動における学生の成長に着目し、効果的な支援方法の構築を目的に研究を行った。AL型授業の活性化には、学生の主体性やリーダーシップ、相互関係を構築する力が不可欠であり、それらALに必要な能力を「社会人基礎力」(図1)と規定した。「社会人基礎力」とは、12の能力要素からなる3つの能力から構成された「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」³⁾である。「基礎学力」「専門知識」に加え、それらを活用する力の育成がこれまで以上に重要となってきた。

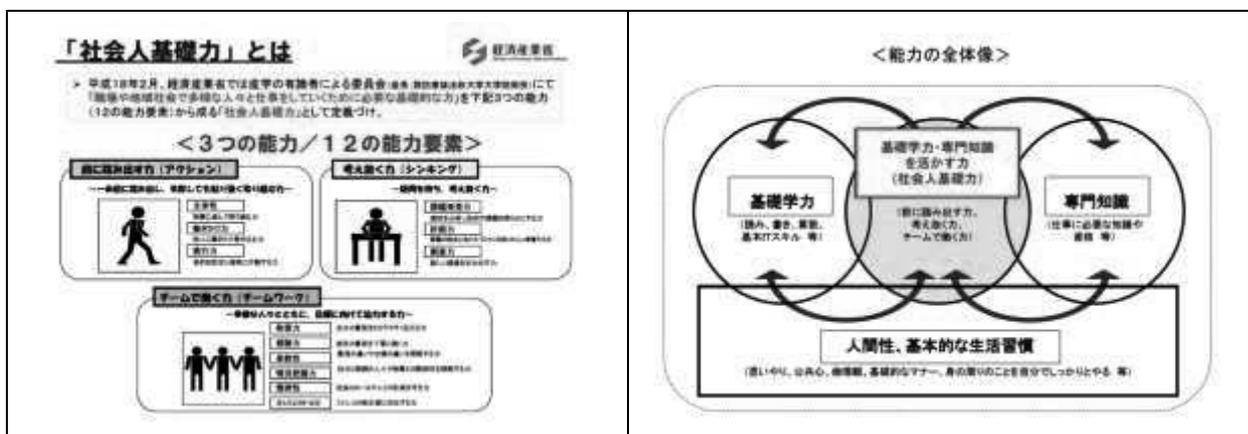


図1 社会人基礎力とは (経済産業省 HP より転載)

本研究は、2016年度小山高専1年1組、3組、4組の混合学級3クラス、計126名の学生に対して、2016年4月から2017年2月まで、『フォーサイトふり返り力向上手帳』⁴⁾及びHRにおける各活動を通して、担任教員による手帳指導(週1回の提出・添削)やHRでのグループワーク、ペアワーク、「構成的グループエンカウンター」(以下、SGE)、「コグトレ(Neuro-Cognitive Enhancement Training: N-COGET)」⁵⁾等を実施し、「社会人基礎力セルフチェック」(経済産業省)、「フォーサイト手帳効果分析レポート」(FCEエデュケーション)等を指標として学生の意識の変化、手法の効果について考察していく。

2. 『フォーサイトふり返り力向上手帳』による学生の変化

2016年4月から1年生5クラスで『フォーサイトふり返り力向上手帳』を導入し、クラスごとに運用を開始した。この手帳は、Stephen R. Coveyの「7つの習慣」に基づいて作られたもので、学生に「計画性」、「実行力」を意識させ、ALに不可欠な「主体的な学び」の強化を図るものである。ALでの、主体的に学び協働的に取り組むことは「7つの習慣」での私的的成功、公的 success のモデルそのものであり、手帳活用を通して「セルフ・リーダーシップ」を身につけ、「リフレクション」ができる「主体性」は重要だ⁶⁾。2015年8月の「教育課程企画特別部会」(文部科学省)でも指摘されているように、ALにおいて不可欠な「主体的な学び」にはキャリアとの関連付け、計画的な取り組み、自らの学習活動を振り返って次へと繋げることが重要であり⁷⁾、この手帳を用いて学級担任が手帳指導を行い、PDCA/PDSサイクルをスパイラルアップしていくことを目的とした。手帳提出(週1回程度)と担任のコメント記入等の指導を行い、2016年6月には出版社の講師によるガイダンスを実施、定期試験の学習計画立案や反省にも活用させた。学生たちはTo Do リスト、学習や生活の記録、学級担任との意見交換や連絡、行事予定等を書いて利用した(図2)。担任は手帳指導を通して学生の学習・生活状況の把握や個別の援助を行った。

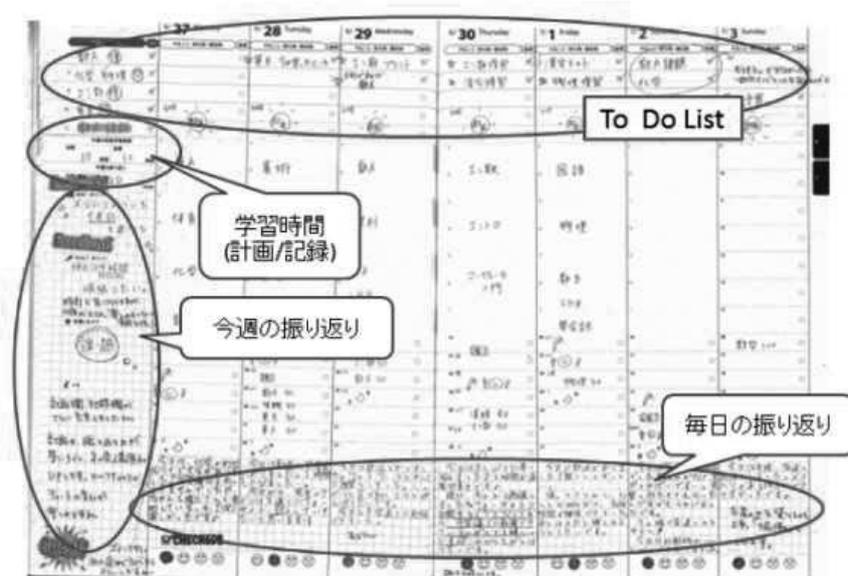


図2 『フォーサイトふり返り力向上手帳』実践例(週間・補足説明は著者)

2017年6月実施の「フォーサイト効果分析レポート」(図3, 4, 5)からは、手帳活用による3クラスの学生の自己認識の変化として、「学習時間(予習・復習)の増加」、「自主的な学習、課題発見」、「予定・課題等の確認」、「生活習慣の改善」が見て取れる(全国平均を上回った項目の枠は筆者による)。

これらの結果から、4月から6月の3ヶ月という短期間ではあるが、手帳指導によって、学生たちの意識が変化し、時間の使い方、計画性に意識を向けるようになったことが明らかとなった。学生や担任の指導による差異を考慮しても、「自己管理能力」や「計画性」、「実行力」が向上し、「わからないところを自分で調べたり質問するようになった」という項目で変化がみられたことは、主体的な学習の基礎の構築に効果があり、AL型授業においても効果が期待できると言える。

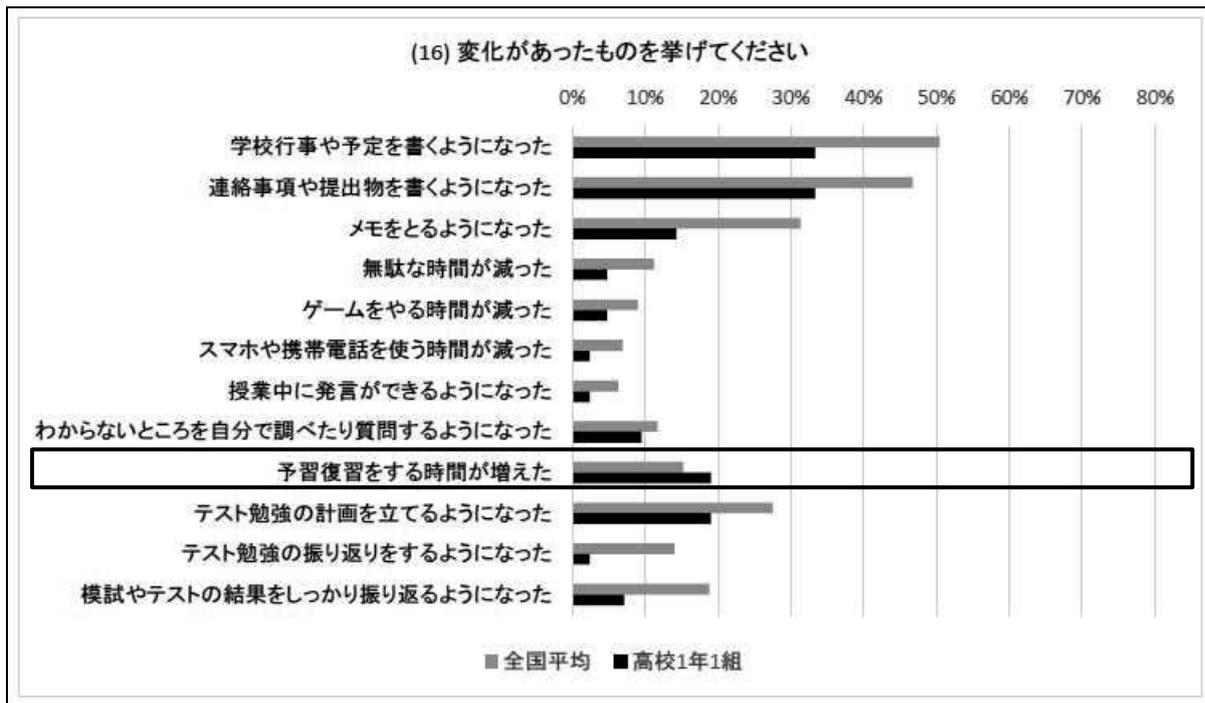


図3 フォーサイト効果分析レポート (1組・一部抜粋。枠は筆者による)

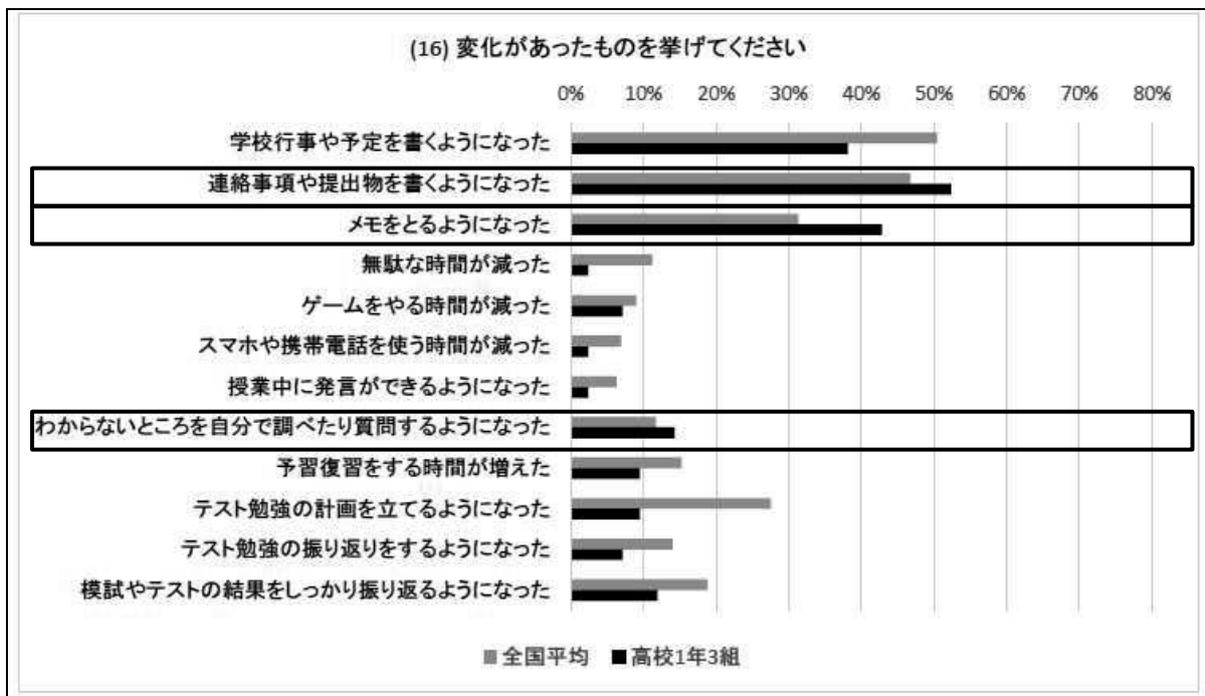


図4 フォーサイト効果分析レポート (3組・一部抜粋。枠は筆者による)

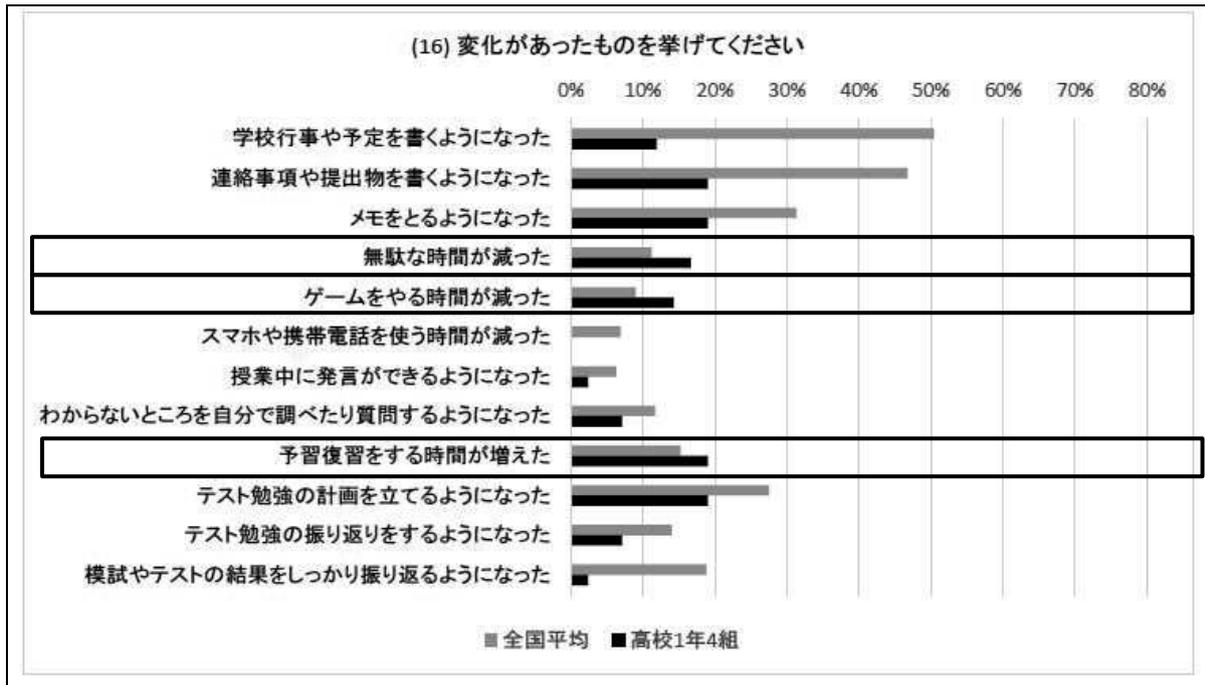


図5 フォーサイト効果分析レポート（4組・一部抜粋。枠は筆者による）

3. 「社会人基礎力セルフチェック」の比較（7月-2月）

「社会人基礎力」で規定されている技能・能力は、「学士力」や「ジェネリックスキル (generic skill)」と同様なものだ。手帳指導を実施した1年生3クラス(126名)において、経済産業省作成の「社会人基礎力セルフチェック」を7月上旬、2月上旬に行い、その平均値・分布を比較した(表1)。アンケートは36項目の質問事項を4段階(4「ほぼその通りである」、3「ややその通りである」、2「ややあてはまらない」、1「ほぼ当てはまらない」)で自己評価し、該当項目の評価によって「3つの能力」と「12の能力要素」について学生の自己認識を調査するものである。

表1 「社会人基礎力セルフチェック」の平均値と度数分布(7月-2月)(126名)

3つの能力	12の能力要素	平均		度数分布	
		7月	2月	7月	2月
前に踏み出す力	主体性	2.94	3.03	0.55	0.55
	働きかけ力	2.99	3.08	0.62	0.67
	実行力	2.95	3.00	0.59	0.60
考え抜く力	課題発見力	2.93	3.14	0.55	0.59
	計画力	2.82	2.98	0.58	0.60
	創造力	2.87	2.91	0.67	0.62
チームで働く力	発信力	2.85	2.96	0.57	0.63
	傾聴力	3.18	3.23	0.56	0.53
	柔軟性	3.16	3.21	0.60	0.53
	状況把握力	2.94	3.08	0.62	0.62
	規律性	3.36	3.44	0.52	0.52
	ストレスコントロール力	2.94	3.04	0.76	0.72

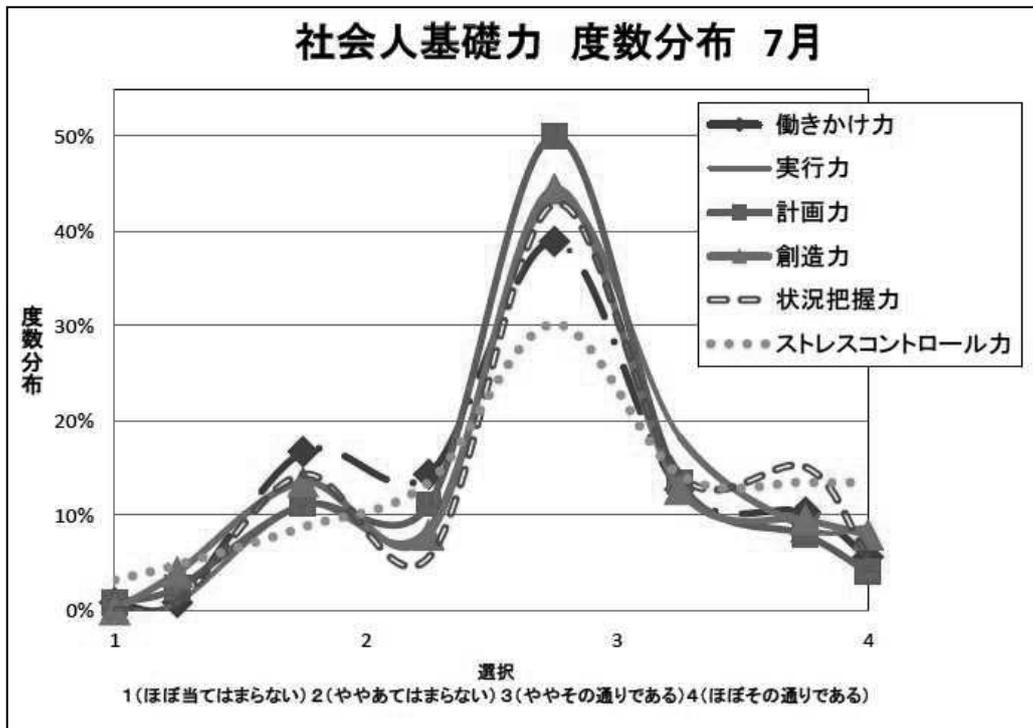


図6 6能力要素(抽出)の度数分布(7月)

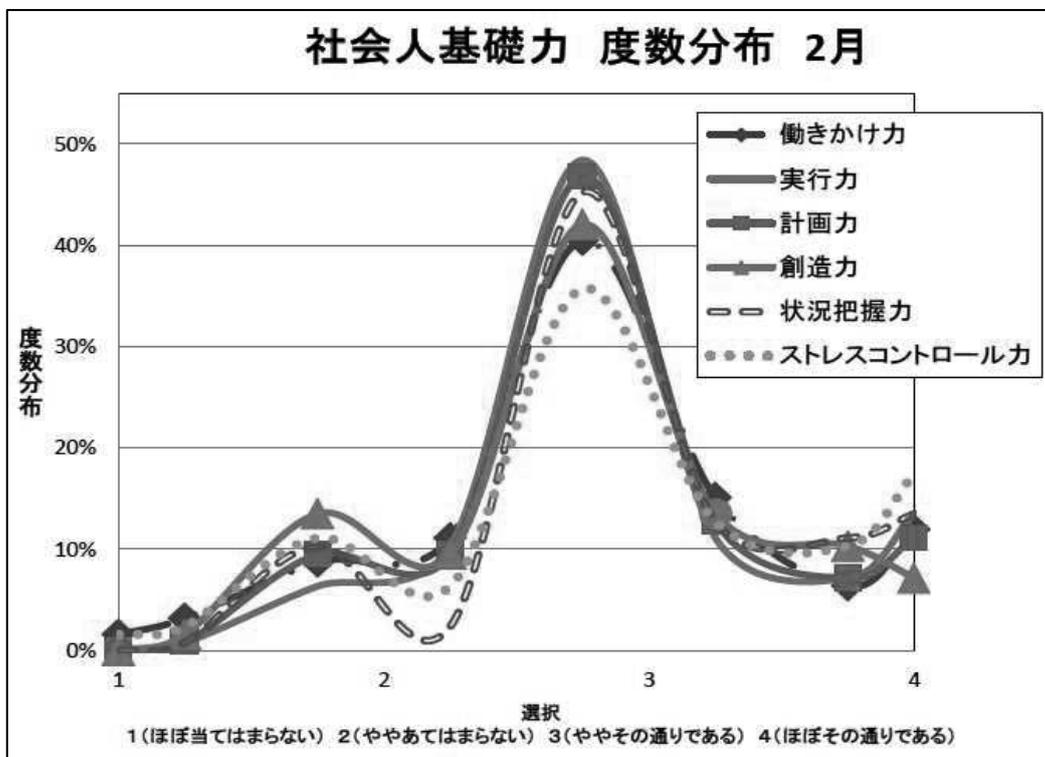


図7 6能力要素(抽出)の度数分布(2月)

7月の結果では、12の要素の各項目では、「規律性」「傾聴力」「柔軟性」で自己評価の高い学生の割合

が多い一方、「ストレスコントロール力」は個人差が著しく、相当する3つの質問において、すべての自己評価が「1」である学生が3%存在した。これら7月の結果を基に、12の能力要素の中から特に「二峰性」「三峰性」が顕著な6つの能力要素を抽出し、2月の結果と比較した(図6, 7)。

図6, 7の比較からは、全体的な平均値の向上が見られたが、中でも(1)「課題発見力」、「計画力」「発信力」「状況把握力」で平均値が顕著な上昇を見せ、(2)「働きかけ力」、「計画力」、「状況把握力」で下位層が減少するとともに上位層が顕著な伸長を示している一方、(3)「創造力」は変化が乏しく、(4)「ストレスコントロール力」が「三峰性」へと変化していること、(5)「規律性」が高い値を保っている、ことが挙げられる。

(1)については、7月の「フォーサイト効果分析レポート」の結果とも通じ、学生の主体性の伸長が表れていると言える。(2)については、「働きかけ力」「状況把握力」等はグループワークや学校行事に関わるHR活動による効果も考えられるが、計画性を意識して学習・生活するようになったことが向上につながったと考えられる。(3)は、今回の実践において学生の創造性を伸ばす活動に主眼を置いていなかったためと考えられ、今後の課題である。(4)からは、高専生活も1年が経過し、自信や充実感のある学生がいる一方、学業や生活面等での新たな悩みを抱えるようになった学生が存在することが想定され、彼らへの個別のサポートの必要性が明らかとなった。

しかし、この結果は学生のセルフチェックであり、個別に結果を検証していくと、自己評価が厳しい(甘い)、目標が高い(低い)など、学生の性格に左右されるところも大きく、必ずしも成績と一致するものではない。ゆえに、教員が学生を日々観察し、個別面談や手帳指導を通して学生理解に努め、適切な助言等を行う必要があるものの、HR指導において、個人やクラス集団の特性を知り、指導に生かすことが可能な有益な情報であると言える。

4. 1年3組における社会人基礎力の変容

「社会人基礎力セルフチェック」のクラス別の変容として、1年3組の7月と2月の結果を比較したのが次の図8である。全体的な数値の向上が見られ、特に上位10%で値の向上が顕著であることがわかるが、前述の通りセルフチェックの結果と生活や成績の実態が一致しない学生もいるため個別の対応・判断が必要である。クラスの雰囲気としては課題や小テスト等の確認をする雰囲気ができ、定期試験や課題提出に向けて助け合い、教えあう姿が見られるようになった。また、清掃活動なども円滑に進むようになった。

1年3組においては、『フォーサイトふり返り力向上手帳』指導に加え、学校行事等のディスカッションを活性化するためのワークシートを作成したり、SGEなどを実施したりして、チームワーク力の向上を図った。また、認知機能の強化を目的とした「コグトレ(Neuro-Cognitive Enhancement Training: N-COGET)」もいくつか活動を実践した。さらに、並木中等教育学校で実践されている「R80」(2文を接続詞で結び、80字程度で授業等をふり返る活動)⁸⁾を参考に、HRで実施した講演のふり返りや生活の反省を実施した。これらの活動も「社会人基礎力セルフチェック」の数値の向上に寄与していると考えられる。これらのようなHRで実践できる活動例は豊富にあり、AL型授業での教科指導に使用できる手法も多く、教科や学生に合わせたアレンジをしつつ、時間を要するものはHR活動で実施するなど、授業での教科指導とHR活動の連携を行えばさらに効果が上がると考えられ、今後の課題である。

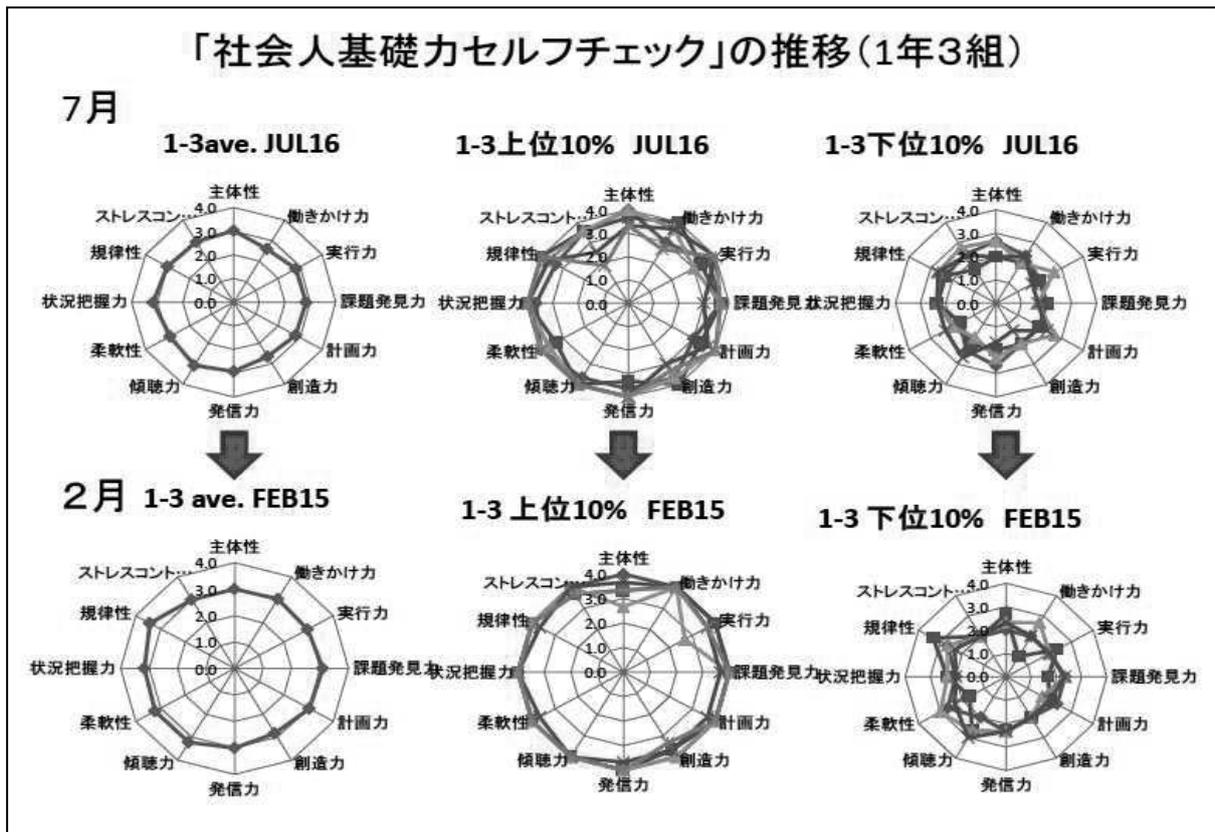


図8 1年3組における「社会人基礎力セルフチェック」の7月・2月の変化
(全体・上位10%・下位10%の比較)

まとめと今後の展望

学生にPDCAサイクルを意識して生活することの有用性を説き、HRにおける日々の生活指導に手帳を活用したことで、学生たちの学習・生活の両面における「行動の改善」につなげ、ALに不可欠な主体性を伸長することができた。「社会人基礎力セルフチェック」の結果からは、学生の自己認識の全体的な向上が見られたが、能力要素によっては顕著な「二峰性」「三峰性」が見られるなど、指導や授業を行う単位集団として見た場合の「個人差」が大きく、生活指導は勿論、AL型授業においても個別の対応、特に下位の学生への個別の支援が必要であることが明らかとなった。今回の研究では、手帳による個への支援に加え、HR活動において集団への働きかけと併用したため、学習・生活面で積極的に協働する姿が見られるようになるなど、教員を介さない相互扶助の関係が構築され、クラスの雰囲気が変わった。その人間関係は2年生となった現在も有効であり、クラス・学科を超えて活動したり、助け合ったりする姿も見られる。2年生からのクラスは学科別となり、担任である筆者にとって学生の編成も変わったが、2017年度は小山高専として『高専手帳』⁹⁾を導入しているため2016年度と同様、手帳指導を継続している。「社会人基礎力」の変容からは、手帳指導とHRでの活動が学生に効果的であったことは明らかであるが、AL型授業への影響や効果と関連付けての分析、活動内容や手法、指導の連携が今後の課題である。

最後に、本研究は部分的に2016年度小山高専「重点配分経費(学科横断プロジェクト)」の支援を受けていることを明記し、ここに記して謝意を表す。

参考文献

- 1) 溝上慎一：『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』， p.7, 東信堂 (2014)
- 2) Ibid., p.39.
- 3) 経済産業省「社会人基礎力とは」 Retrieved July 14, 2016. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
- 4) 『フォーサイトふり返り力向上手帳』， FCE エデュケーション(2016)
- 5) 宮口幸治：『コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング』， 三輪書店 (2015)
- 6) 小林昭文：『7つの習慣×アクティラーニング』， pp.116-140, 産業能率大学出版部(2016)
- 7) 文部科学省「教育課程企画特別部会 論点整理 (案)」 Retrieved September 28, 2016.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm
- 8) 並木中等教育学校ホームページ Retrieved September 29, 2017. <http://www.namiki-cs.ibk.ed.jp>
- 9) 有馬弘智, 他：『高専手帳』， メディア総研 (2013)

【受理年月日 2017年 9月29日】